

【講演会】

## 禅と学生

——禅を通じて学生と触れ合った三十年——

岡 本 貞 雄

### 禅との出会い

不思議なご縁で、今日、この場に立たせていただいています。果たしてどんなお話ができるのか、あまり自信はございません。これだ、というふうに、端的なお話ができず、それが皆さんのお役に立てるようなお話ができれば素晴らしいのですが、どうもそうはいかない。それどころか、年を取りまして言語不明瞭、意味不明ということのほうが多いのではないかと心配しております。

本務校である広島経済大学は、全国に先駆けて、十数年前に学生の授業評価を一般公開いたしました。公開したころは、私の授業は非常に評価が高くて、自分でも、して

禅と学生（岡本）

やったりと思っていたのですけれども、年を取るたびに評価が下がってまいりまして、近頃では、学生の評価の中に、「もう辞めたら」というふうな、非常に親切に厳しいことを言ってくれる学生もいるくらいで、果たしてどれくらいお付き合いさせていただけるか分かりませんけれども、一時間二〇分ほど、お話をさせていただきます。

今回、岡島先生からお話をいただき、皆さんにお話をさせていただけるということで、喜んでお引き受けさせていただきます。修行は一応居士として臨済宗の修行をいたしました。しかし、専門道場できちんと修行をしたわけでもありませんし、禅をこうだ、ああだと言えるほどの者ではないのです。

ただ高校時代から六十四歳の現在まで続けており、二十代は臘八接心を欠かしていません。その経験が高校、大学での教員歴の中で、学生さんのお役にたった部分もあるかなと思っっています。ですから、その経過なり状況について、皆さんにお話をさせていたただきたいと思えます。

私は、父親が転勤族で、だいたい一年に一回、ひどいときには三カ月くらいで転居しました。二十歳までの間で、一番長く住んでいたところで三年です。

懐かしい思い出に残る、居場所を持つていないのです。ここが故郷というような感覚のところがありません。

当然戦後生まれですけれども、広島の基町という、原子爆弾の投下地点から四百メートルか五百メートルのところで生まれました。街の真ん中でして「うさぎ追いしかの山」というような感じの所ではありません。ですから、あまり心の中に故郷の原風景というものは持つていないのです。

そういう居場所がない人間が高校生るとき学園紛争というものに遭遇しました。皆さんは歴史として聞いておられるかもしれませんが、昭和四十五年ころ日本では、東京大学が入試を取りやめるほど、国中をわかせた大変な紛争が

ありました。そのときに私の高校も、その紛争に巻き込まれたというか、紛争を買って出たというか、活動家が二回ほど学園封鎖をやり、何日か休校になったような学校でした。そうすると生徒同士が、ああでもない、こうでもない、おまえはけしからんということで、非常に人間不信の状況というものが起こったのです。

故郷はない、そして人間関係も信じられないという状況が、自己を確立していく大切な時期に起こりました。

当時、宗教関係の本を二冊だけ読んでいました。皆さんは名前もご存じないかもしれませんが、古田紹欽先生と関口真大先生の『宗教入門』と『禅入門』です。それで従兄の勧めもあり禅寺へ、ふつと行って見たのです。

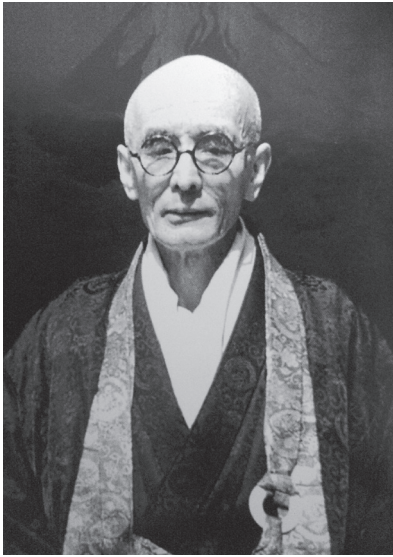
禅寺ですから、理屈を言い合えるような世界ではないですね。禅堂へ入って、拍子木がぱちんと鳴って、鐘が鳴ったら座って、あとは何も無い世界です。別にあれこれしゃべる必要がない。

あれだけ理屈でわあわあ言うって、それこそ石を投げる、ガバ棒という垂木の棒で殴り合いをするような、騒然とした日本の中で、別次元の静けさ。環境の静けさが、自分の

心の中に懐かしさとして響いてきました。

先ほど申し上げたように、私には故郷がありませんから、それに代わるもののように感じました。それが禅寺へ通うようになったきっかけです。

広島の上原というところに、佛通寺という一応臨濟宗の本山になっている小さなお寺があります。そこに藤井虎山という老師がおられました。高校を卒業してすぐこの方に入門いたしました。禅宗のお坊さんだから、何かしなめ面



藤井虎山老師

禅と学生（岡本）

をして、下手に寄らばたたくぞというような感じかという  
と、そうではないのです。入門の形通り相見香を焚き、お  
茶を一緒にいただき、入門に至った経緯などをお話する  
と、「そうか。君はそうか。ただ、禅をするにあたって君  
に言っておくことが一つある。道を楽しむという言葉があ  
るだろう。普通、道楽というと、あまり良い意味で使わな  
いけれども、本来は道を楽しむということだよ。道を楽し  
むということは、長く続けないと分かんないのだ、あせらず  
気長にやりなさい」と、優しく仰いました。

大学一年生の時ですから、どうしても禅の世界へ悟りを  
求めてとか、それこそ生死を超えろとか、格好よく言え  
ば、燃えるような求道心とでも言えるのでしようが、何か  
功名心というか自己顕示欲の反作用のような感じのものが  
あったと思うのですが、そんな、若者に向かつて、道を楽  
しむのだと、その中でいろいろと味わいというものが見え  
てくると仰ったのです。

「どんな安い道具でも、それを長く大切に使い続けるこ  
とによって、そこに味わい、深みというものも見えてくる  
ものだから、決して焦って答えを求めるようなことはしな

いように」ということを、教えてくださった方なのです。

大学は東京の日本大学へ進学しました。法学部です。刑法をやりました。本当は法学部へ行って、司法試験を受けようと思っていたのですが、高校時代から禅寺へ行くような人間ですから、入学したころには、人間の法よりも、仏さんの法のほうが絶対面白いぞと思うようになっていました。

愛知学院大学も非常に大きな大学ですけども、日本大学も大きな大学ですから、東京神田三崎町の本校だけでは学生が収容しきれず、教養部が静岡県三島市に置かれていました。三島には、江戸時代、臨済宗中興の祖と言われている、白隠禅師が開かれた龍沢寺というお寺があります。白隠の古道場と言われているのですが、そこから歩いて三〇分ぐらいのところに、たまたま下宿したのです。ですからこれは、禅とのご縁としか言いようがないと思っっているのですが、怖いもの知らずで専門道場である龍沢寺へ行って、そこにおられた雲水さんに、「広島から来ました。座禅をさせてください」というようなお話をしました。雲水さんは、それぞれ資格取りもあるし、きちんと修行をするために来られているところへ、ひよこひよここと大

学一年の学生が訪ねて来たということ、何だこいつは、変なやつが来たぞ、という感じでしょうか。ただ、「何だこいつは」だけに、すぐに老師に伝えに行ってくれたのです。気の利いた雲水さんだったら、「当寺は専門道場です。一般の方の参禅はお断りいたしております」とか言って断られるのですが、こちらがあまりにも唐突なので、ふっと心が動いてしまったのかもしれない。

老師のところへ「変なのが来てますよ」とでも伝えられたのでしよう。老師も「何だそりゃ」ということで、玄関まで出て来られまして、「上がれ」ということで、玄関を伺い、「ここですと雲水の迷惑にもなろうから、近くの禅寺で座禅をしたらどうだ」ということで、近くで禅会をやっているお寺を紹介していただきました。三島市の隣に、清水町というところがあります。その久米田という部落にある、檀家が十軒もないような正眼寺というお寺です。そこで座禅をさせていただきながら、龍沢寺へも行きました。中川宋淵、鈴木宗忠というお二人の老師に、非常にかわいがっていただきました。大学、大学院の十年間、学期中は

時間があれば、龍沢寺へ行つて指導を受け、休み中は広島へ帰つて、佛通寺で藤井虎山老師の指導を受けるようなことで、学生時代を過ごしました。いまでもその思い出は、ありがたく残っておりますけれども、学生時代はこのようにして座禅のご指導をいただいております。

### 禅を習う

先ほど古田紹欽先生の名前を出しましたがけれども、高校時代に読んだ宗教書は二冊だけなのですが、その内の一冊の著者の古田紹欽先生に大学一年の時にご縁をいただきました。この方は北鎌倉の東慶寺、縁切寺ということで有名な寺なのですけれども、その東慶寺の丘の上にある、鈴木大拙先生が残された松ヶ岡文庫の文庫長、要するに鈴木大拙先生の跡をとられた方です。その先生が、十一月だったと思いますが、三島の佐野美術館に講演に来られたのです。私は古田先生の本を読んでいたのでそこから、そんなに偉い先生が来られるのならということで、話を聞きに行きました。会場は学生がいるような場所ではありませんでした。本当に禅の話をもっとも聞きに来られたような、どち

禅と学生（岡本）



古田紹欽先生と著者

らかというところ、中年か、それ以上の年の方が多い中で、ぼつんと一人若いのが、一番前で座っていました。

そうすると、これまた「こいつ何だ」ということで、古田先生が「君は何だ」と話しかけてきてくださいました。

おまえ何だつて、禪的に答えなくてはいかんのかなとも思いつつ、素性を述べ、広島から来て、いま三島の日大教養部で勉強していますと言ったら、たまたま古田先生が、松ヶ岡文庫の運営があるということで、北海道大学を辞められて、日本大学の精神文化研究所の教授になられており、「おまえ、面白いやつだ。二年目から東京へ来るのだな。わしは日大本部にある精神文化研究所で、週に一コマだけ、文理学部の大学院生に講義をしているから、その講義へ出ておいで」と言われました。

二年生の四月に研究所へ行きまして、「どうせ分からんだろうから、一番後ろへ座って話を聞いておれ」ということで、お話を聞かせてもらっていました。

私としては、まあまあ、面白いなという気持ちはあつたのですけれども、ほとんど分かりはしませんでした。古田先生は原本を持って来られて、それをはじめからずつと読

んでいけるだけなのです。読んでいかれて、ご自分で解り積され、時々「ここは面白いなあ」と言われたり、「ここはちよつと分からんなあ」とか言われるのです。それで「あとは勝手におまえらでやれ」という感じですよ。

ただ出席させていただいた九年間の内、七年間は『正法眼蔵』を読んでくださったのですが、これは私にとって、ものすごい財産になっています。岩波の思想大系本を二冊持ってこられて、頭から読んでいくことだけをやらされました。こうやって学生時代から座禅をしてきたのですけれども、そこそこのいろいろな方にお世話になっています。広島

の佛通寺には少年林（少年少女座禅林間学校）という行事がありました。子どもさんたちの座禅体験です。一泊二日か二泊三日なのですけれども、それのお話もさせていただきました。山内の和尚が近隣の子どもさんたちを集めて座禅会をされるのですが、百人を超える大変な人数です。座禅だけではなく食事から風呂、就寝の世話、勉強まで見なくてはなりません。いまはこんなに集まられるか

どうか。そうやってお手伝いもしたりして、禪寺の生活の中で、いろんな方と接する機会を得ましたし、後に学生の指導をしていくうえでこのお世話の経験が大変役に立ちました。

もう亡くなりましたけれども、紀野一義先生が真如会という会を主宰しておられ、その会は集合というか、結集けつじゅうといつて高野山などに三百人くらいの方が集まるのですが、この会の運営のお世話もさせていたっていました。こういうことを学生時代に経験しておりました。

大学院の修士課程に入るときは、古田先生から、「せっかく三年間仏教の勉強をしてきたのだから、そのまま仏教の勉強をしたらどうか」とお勧めいただきました。ついで、大正大学へ進学しなさい。大正大学というのは、だいたい浄土教学に強い大学なものですから、そこで一遍上人の研究をしたらどうかということをお勧められて、その研究をしておりました。博士課程に入ったところに、松ヶ岡文庫に來いということで、文庫の中に部屋をいただきました。まあ、書生です。

別に勉強を見てくださるわけでもないし、授業と同じで

禪と学生（岡本）

す。分かれれば「はは、面白いね」と、分からなければ「分からんな」というだけで、勝手にやれということ、私も勝手にやらせていただいていたのですけれども、それで育てていただいたのです。ある時大学の紀要に載った論文を先生に提出したら「最初の一行を見ただけで、程度がわかる」と言われ、机の上に投げられたこともありました。そのくせ顔を合わせるたびに「論文を書け、論文を書け」と言われ続けました。

文庫で何をしていたかというと、松ヶ岡文庫の周りの掃除です。雪が降れば古田先生と雪掻きです。大拙先生の月命日は十四日ですけれども、その前日には大拙先生の墓掃除と、文庫から墓所までの階段の掃除ということをやっております。

ただ、仏教学の系統は、大学院へ入っても、なかなか就職がないのです。特に私は在家のものですから行く当てがなく、困ったなと思つているときに、たまたま愛知学院大学の先生方、大学院生の方々が、非常に優しく受け入れてくださいました。中国の杭州へ視察旅行にも連れて行ってくださいました。前田惠學先生もおられましたけれども、一緒



禅と学生（岡本）

に活動する機会を私に与えてくださっていたのです。

### 実践と教育

大学院を修了し、お寺から出家のお誘いをいただき、お寺に魅力もあったのですが、どうしても広島に帰らなくてはいけない理由があり、職のないまま松ヶ岡文庫の研究員という肩書だけいただき、アルバイトで生活しておりました。そのような時、あることがご縁で、インド旅行へ連れて行っていただきました。

三十五年くらい前になりますが、インドの仏跡には、土産物屋さんがたくさんあるというか、歩いていると「これ買え、これ買え」と言っていて、いろんな人が寄って来るのです。その人たちの中の一人が、「この仏像を買え」と言っていて黒い石の仏像を見せにきました。見るからにいいなと思って、二、三時間いろいろやり取りがあったのですけれども、思いきって買いました。

その次の日に、ブッダガヤの大塔へお参りをして驚きました。壁面いっぱい無数の仏像が彫つてあるのですが、私を買ったものは、それを剥がしたものらしいのです。



ブッダガヤの大塔と仏像



これはまづいなというか、大変なものだということがそこで分かりました。しかし、もう剥がされているので、その修復は不可能です。おそらくこれをしかるべきところに返してもどうなるか分かりません。また誰かに売られてしまいかもしれません。

この時に私は、一つの誓いを立てました。私はお坊さんにはなれない。「でもしか」ではないのですが、学校の先生になろうと思っていました。居士として座禅会のお世話もしていましたので、「必ず日本で若い人たちに、座禅をお伝えするような会を開きますから、どうぞその時のご本尊として、日本にいらしてください」という誓いとか、お願いをこの仏像にいたしました。

そのご利益かどうか分からないですけれども、今日もこうして禅のお話をさせていただいております。

広島へ帰りまして、広陵高校に採用していただきました。広陵高校といえば野球部が有名ですけれども、野球部のほうで、精神的なケアをしてくれる人を探しているというところで、私に声をかけてくださいました。当然授業もするわけですけれども、野球部の副部長として部員のお世話

をさせていただきました。

強い野球部というのは、いろいろ大変なのです。部員が百二十人ぐらいおりました。その中でベンチへ入れるのは、その当時は十五人。それ以外の生徒さんはベンチに入れないので、スタンドで応援です。同じように野球部員として部費を納めて、保護者もお金を寄付し、それを使うのはレギュラークラスだけ。当然不満は溜まっています。

レギュラークラスはレギュラークラスで、試合のプレッシャーがあります。そのプレッシャーの相談にも乗りましたが、私が主に担当したのはレギュラーではない生徒たちです。私がこの生徒たちの精神的な不満、つらい思いを解消してやらないと、野球部全体の運営がうまくいきません。ということで、レギュラーは月に一、二回ぐらい遠征とかへ行きますが、そういう機会をレギュラー外の生徒たちにも与えてください、ということで、私が引率して遠征試合に行ったこともあります。

地方のあまり強くないチームでしたら、広陵高校の野球部と練習試合ができるというのは、とてもためになりますので、非常にありがたいことです。そして彼らも、自分た

## 禪と学生（岡本）

ちはいつも寮でくすぶっているだけなのが、こうして遠征に出られるというので、非常に喜んでくれました。広陵高校ではこういう仕事をしておりました。

三年生になり最後の夏の大会ということになりますと、みんな目つきも変わってきて、「先生、もうあがつてしようがないんだ」ということで、相談に来る生徒もいました。

そういう時に、じゃあ、ちよつと座ってみるかということとで、一緒に座禅をしたり、話をして、君は「あがるあがると言うけれども、相手はあがつていないのか。君がそういうふうに関心して、いてもたってもおられない気持ちには、相手にはないのか。おそらく同じ気持ちだろう。ということは、あがつている者同士ということになる。あがつている者同士なら、あがつてどうしようも弱気になるのではなく、あがつているけれども、一生懸命やるしかないのじゃないか」というような話をして、うまいこと切り抜けてくれたという経験もいたしました。こういうことを広陵高校で三年ほどやりました。二年間は、いまは阪神の監督になっている金本（知憲）君のお世話もいたしました。彼も禅寺へ行って座禅をしています。

このような経験がありましたけれども、せっかく仏教学の勉強をさせていただいたのですから、やはり研究もしたということとで、広陵高校は辞めさせていただきました。広島に帰ってからは町の禅寺で、ずっと禅会のお世話をしていました。維摩会ゆいまかいという、明治時代から続いている禅会です。また子ども会の禅会のお手伝いなどもさせていたっていました。

こうような禅会は、ある程度世間の注目を浴びます。マスコミは精神的な成長というものに関して興味を持っておられますので、取材に来られることがよくあり、マスコミの方とのお付き合いができるようになりました。学校以外でこのような活動をやりつつ、研究を何とかということ、愛知学院の先生方にもお世話になりながら勉強をしておりました。

## 禪と学生

それがご縁で、岐阜県的美濃加茂市にある正眼短期大学という小さな短期大学で、講師として教えさせていただく機会をいただきました。正眼短期大学は臨濟宗の専門道場

である正眼寺が設立した、学生さんの半分ぐらいが卒業したのち雲水になるために、集まって来られている短大なのですが、あとの半分くらいは、一般在家の方の子弟が入学されているのです。そうすると、お坊さんだけでは指導が難しいところがありまして、そういう人たちに対してケアするというのが私の仕事でした。広く言えば、学生相談のようなことをしたのですけれども、短期大学で教えているという実績ができました。

精神的教育の社会的なニーズというものをマスコミの方言われたりすると、大学にもそういうものがあってもいいのではないか、というような非常に柔らかな考え方をされる経営者の方がおられました。それが広島経済大学の副学長（現理事長）で、「そのような面白い人物がいるのだったら、うちの大学で採用しよう」ということで、わざわざ「東洋思想」という科目を設定してくださいって、私を採用してくださいました。

私がある時に申し上げたことは、「とにかく学生のためになることを、させていたただきたいと思います。研究をしないわけではありませんけれども、研究をすることによつ

禅と学生（岡本）

て、学生を疎かにすることは、絶対にいたしません」ということでした。インドから招来した仏像のこともありますが、ともかくこの大学で禅が役に立つことがあるのではないかとということで、私は心中期するところがありました。

大学生はそれぞれの専門の学部、学科に所属しています。そうすると、その専門の学部・学科が大好きだという人もおられますが、逆に、専門の学部・学科は大嫌いだと思われている方も結構おられます。何か専門のプレッシャーから逃げたいなという方がおられるのです。

愛知学院大学へ進学されるような方々には、ある程度宗教的なものに興味を持たれている方も多いと思いますが、広島経済大学というのは経済の専門大学です。経済は何をするかと言いますと、端的には実業です。

学生たちの中には、大学にいても何か面白くない、ただ何となく大学へ来たけれどもしたいこともない。という人も結構います。そういう人たちに発想を自由にしてもらう。その中でいろいろなこと気づいていき、それを大切にしたらどうか？というような話をずっと続けました。

私は仏教学を勉強していますし、禅の逸話や何やら心に

まつわる話をするわけですが、それが非常に受けてしまいました。それで座禪愛好会というサークルができました。経済系の大学では考えられない。苦しい座禪をするクラブなど「全員がマゾ状態か！」という記事をスポーツ新聞に興味本位で書かれたこともありました。世間一般から見たらそうかもしれないと思うのですが、座禪愛好会という名前で会をやっていたら、ある禅寺の有名な老師から、「座禪を愛好するとは何事だ」と怒られたこともありました。そう言われればそうなのですが、大学の規則で、クラブは愛好会から同好会になって部になるので、名前にこだわる方がおかしいと、気にしませんでした。

現在全国の大学にどれぐらい存続しているか分かりませんが、例えば東京大学には陵禅会という禅会があります。この禅会の中川宋淵老師、鈴木宗忠老師、いまは後藤栄山老師という代々龍沢寺の老師方が指導に行かれていますけれども、ずっと続いている禅会です。

お茶の水大学には掬水会という禅会がありました。学習院大学や中央大学にも禅会がありました。五十年くらい以前には座禪が結構、学生の主体的な活動になっていたの

です。それがあって、大学で座禪のクラブをやることは、別に珍しくも何ともないことなのですけれども、たまたま、ご縁というのは恐ろしいもので、広島経済大学の経営学科は、神戸大学の経営学部とご縁が深く、その神戸大学には般若団という、猛烈な修行をされる禅会がありました。本を何冊も出されていますけれども、神戸大学般若団が道場へ接心に来たら、雲水さんのほうが位負けするぐらいの、迫力を持っていたと言われていました。その般若団の団長だった稲葉襄先生という方が、神戸大学を退官されて、広島経済大学の経営学科を設立に来られたというご縁があったのです。

そのため、広島経済大学の教員の中にも般若団出身の先生がおられ、禅への理解があり、私としては、非常にやりやすかった面がありました。それで座禅会をずっとやっておりました。そうしておりますと、理事長は、非常に柔らかない発想をされる方ですから、教養科目の担当者も三、四年生のゼミを持つということになりました。

普通、大学は文科省の指導の下にあるわけですから、専門のゼミというのは、それぞれの学部の専門を学ばなければ

ばいけないのだけれども、幅広く学んでもいいじゃないか。もうゼミがない大学もあるのだからという事で、大きな転換がありました。それでゼミを持たせていただきました。そうすると、専門嫌いの学生がどっと応募してきました。彼らは発想が、経済系の大学生の発想ではないですから、面白そうかどうかゼミ選びの目的になります。

ゼミの定員が二十二人に対し四十六人の応募がありました。ですから、こちらが強いのです。買い手市場ではなく、売り手市場ですから、条件を出しました。私が座禅愛好会をやっているのは知っているだろう。その座禅をきちんとしてやることを条件として、それが呑めるのであれば、うちのゼミへ来てくださいと言いました。学生にしてみれば、まあ渋々ですけれども、座禅というのは、勉強しなくてもいいのです。するほうがいいですけど、基本的なところは、きちんと座って、その中で自分なりに何かを見いだしていけばそれでいいわけです。

ほんとはしんどいことです。きついことです。これをつけていくのは大変なことです。素人の悲しさというか、浅はかさというか、いやな専門の勉強をして本を読んで、

禅と学生（岡本）

文章を書くよりは、そのほうが楽だろうと思うのです。それで「いいです、やります」と入ってきました。ゼミ生二十四名のうち女子学生が十一名もいたのには驚きました。本当の専門道場の接心は七泊八日なのですけれども、うちは五泊六日で、年に一回だけ座禅会をやるけれど、それでもいいかと言うと、

「いい」と言うのです。

私にしてみればしめたもので、最初は禅寺でやっておりました。

みな一応はきちんと座っております。禅寺へ行つて、雲水さんと一緒に接心をやりました。お経も読んでいます。

広島は安芸門徒とい、浄土真宗教団の強いところで、禅宗には



それほど信者がいません。修行者もそれほど多くはいません。雲水さんは僅かで、居士として座禅をずっとやっていたような方々が来られて座っておられますが、うちの学生の方が多のです。そうすると、素人が圧倒するわけです。これはやはりよろしくないなという気がします。世話をしてくれた和尚がおりますけれども、あまり良い顔はしません。迷惑だっと思えます。

「しかし、こうやって来てくれて、座禅の体験をしてくれるだけでもいいよ」と言ってくださっていました。この方は濱田徹道老師と言われて、藤井虎山老師の跡を取られた方で、ずっと妙心寺派以外の臨済宗の布教師会の会長を長くされていたような、非常に説法のうまい方でした。この方がうちの学生の世話もしてくださっていました。そこへ行っていたのですが。女子学生に雲水さんが毒されてしまいました。これではお師匠さんは、たまったものじゃないです。その辺で「座禅愛好会はけしからん」というようなセリフも出てくるわけです。

学生にしてみれば、五泊六日の座禅は正直きつかった、確かに座禅そのものは長い時間座りますし、足も痛いし大

変だったのですけれども、彼らにしてみれば異体験です。終わってみれば、結構面白かったというのがあります。それなりに達成感もあり、良い思い出としていまだに語り継がれています。

これではお寺にご迷惑がかかるということ、また接心の形が学生に最も良いかということでもありません。やはり、学生は勉強をしなくてはいけません。専門の勉強ではないけれども、知的好奇心を喚起する禅の実践方法があるだろうと考えました。

私は師匠から「禅を道楽としてやれ」と言われると共に、もう一つ言われたことがあります。それは「いのちをみつめる」ということです。

藤井虎山老師が書かれた本には、「いのちみつめて」とか「いのちの微笑」という題名を付けられるほど、「いのち」ということに重きを置かれています。「いのち」ということは当然、自分自身のいのちでもあり、森羅万象すべてを含むいのち。それを見つめる、それを見つめ続け生き抜くことが禅なのだという教えます。

これを五泊六日の座禅会だけで学生に分かれと言ったと

ころで、そんなことができるわけがありません。ただ、自分の常識を越えた体験をもらうというだけの時間にし過ぎないのであれば、お寺に迷惑をかけるよりも、自前で作ろうと決心しました。



禅と学生（岡本）

過去にいろいろな仏教の会の運営や、座禅会のお世話とか、子どもの禅会のお世話などをさせていただいていましたので、どうやって禅会を運営すればいいかというノウハウは持つておりました。好都合なことに自分の大学の研修センターに、禅堂、食堂、浴室、寮舎、典座が、きちんと独立して確保でき、ちゃんとした座禅会ができるだけの設備がありました。それ

で研修センターを全館借りきりまして、自分たちで禅会を実施することにしました。

そういうことをやるというと、一般社会の目から見ると、これは面白そうなことをやっているなということ、広島県の地方紙『中国新聞』の「洗心」欄、これは毎週、結構読者のいる欄なのですけれども、そこへ「学生の自主精神を育てる。心のケアにも一役」と紹介してくださいました。会が始まる前、事前に上級生が初めて参加する学生たちに、持鉢の使い方から教えます。要するに、規則どおりに禅寺生活を一応はやらせます。ただ、その中でいろいろな工夫を加えようということ企画しました。実際、学生は座禅をする覚悟でゼミへ来ていますし、それ以外にも、座禅を試みたいという意欲のある学生や、一般の方も受け入れておりました。

当時の日課は、起床は普通の禅寺より遅いですが、朝も、朝四時十五分に開静、朝課、粥坐、日天掃除、座禅、提唱、作務、斎座、休憩、座禅、八ツ茶礼、講演会。この講演会というのが、工夫の一つです。で、薬石、沐浴、十八時から二十二時まで座禅、解定茶礼。こういう日程で毎



## 禪と学生（岡本）

日座禪をしました。

大広間を禪堂にして座るのですが、和服で袴を着けて座禪をする学生もおります。それぞれ頭の中で何を考えているかまでは分かりませんが、まあ、素人の禪会としてはよくやっているかなと思いました。

禪堂の世話をしてくださる直日さんは、正眼短期大学で同僚だった方ですけれども、正眼寺へ雲水として十年以上もおられた人なのです。この方が毎年来てくださり、学生を指導してくださいました。

普通、何かさせますと面倒くさいなと、やらされて嫌だなと言うのですけれども、彼らにしたらもの珍しいのです。嫌な顔もせず、楽しんでやっています。

食事はすべて正飯で、きちんと作法どおりにいただきます。学生は食べるだけではありません。食事の準備もします。供給、食事を配るほうも一応は格好になっています。こういうことをやらされると、本心では嫌だなとか、面倒くさいなという気も確かにあると思います。けれども、珍しいし、先輩たちもやってきたし、やろうということだけでいっていききました。

中には解定後、会場の屋上へ上がって、夜坐を組んでいる学生もいました。後から学生が写真を見せてくれて知ったのですけれども、その中にはポーランド人の留学生で、現在日本駐在のEJ事務所勤務している人もいました。

そこまで彼らを追い詰めたわけでもないし、彼らに夜坐をしろうと言ったわけでもないのですけれども、何か思うところがあつたのだろうと思います。この辺が、座禪の力かもしれないかもしれません。座禪の持つている力、そういうものが働いた。それこそインドから来てくださった仏様の力かもしれない。座禪会は二十四年続いています。

作務で草刈りをさせます。午前中に二時間ほど時間を取っているのですが、喜々としてやります。座禅会で何が楽しかったかというところ、彼らは「草刈り」と言います。普通、何もないところで草刈りをやれと言ったら、何でやらなければいかんのかだとか、何でわれわれがそんなことさせられなきゃいかんのですかと、文句が出るかもしれません。けれども、座禪を夜も朝もやっているところ、この草刈りの時間が楽しくて楽しくてしょうがないわけです。広島のは土師ダムはじというところの近くに研修センターがありまし

て、その周りの草刈りをしているのですが、十年間ぐらいやっただけですから、国土交通省から表彰していただいたこともありました。

### 実践の中で

数十人の学生が参加し座るわけですが、通常の接心と違うのは、講演会の時間を設けていることです。この講演会は「いのちをみつめて」という題を付けて、中四日に一人ずつ講演していただくものです。ただ、これも、ご縁というのは恐ろしいもので、広島駅から車で二時間もかかる山の中の会場に、多くの方が東京や名古屋からも講師として来ていただきました。アメリカから来てくださった方もおられます。ご存じの方がおられるかもしれませんが、ツルカメコーポレーション（現あずみ）という宝石店が名古屋にありますが、その創業者で、中国の西域で活躍しておられる、小島康誉さんとか、数年前にこの会に来られてお話をされたと思うのですが、娘さんを飲酒運転の交通事故で亡くされて、それで「いのち」というものに深く目ざめられ、本当は物理の大学の教授だったのですけれど

も、おうちがお寺だということもあって、それから一生懸命、仏教の修行をされた江角弘道先生とか、相田みつを美術館の館長の相田一人さんなども来ていただきました。講演料一万円、交通費実費ですが、謝金を受け取られなかった方が随分おられます。

学生は早朝から起きて活動していますので、午後二時からの講演会の時間は眠くて仕方がありません。それで寝ている者を、先輩が後ろからひっぱたきます。いまではそういうことをすると、すぐに暴力だとか、何とか言うのですけれども、遠くから講演に来ていただいている方に対して失礼だからということで、起こして回ります。あまり強くはたたきませんが、「素晴らしい教育だ」とおっしゃってくださったこともあります。

このような精神的な活動、それもただ座禅しています、というだけではなく、その時にこういうふうな話を聞いて、勉強していますよということは、マスコミの方が非常に注目されます。マスコミの使命は、社会に役に立つであろう情報を紹介することなのです。ここで語られた話の内

禪と学生（岡本）

容を紹介することは、社会の役に立つという判断を、マスコミの方はよくしてくださいました。

自分たちの座禅会のこと、記事になって広く紹介されると、学生たちは喜びます。そうするとまた、次の年もやろうということになるのです。

そうやってずっと一年に四人ずつ講師をお呼びして講演会を実施してきました。講師の中には、この会のために、前日まで三日間ホテルにこもられ、内容を吟味されてから来てくださった方もおられます。景山崇人さんといわれ、海軍兵学校を昭和二十年三月に卒業され、戦艦大和に乗艦されましたが、沖繩への特攻前日に退艦させられた方です。株式会社タカキベーカーリー（アンデルセングループ）を大きくされて、いまのようなかたちにされた立役者です。このような方が、「学生が座禅をして、真剣に命について考えてくれるのならば話をしましょう」ということで来てくださいました。それまで、大和に乗っていたという話はされていたのですけれども、詳しくその時の思いや状況を話をされたのは、この時が最初だそうです。これが記事として紹介されてからは、至る所から話をしてください

という依頼があり、それからは受けられるようになったのですけれども、この時がきっかけなのです。こういう方が何人もおられます。

勝場勝子先生は、昭和十八年十月、大学生たちがいよいよ戦争へ出て行かなくてはならなくなったときに、東京の神宮外苑で行われた、学徒動員の壮行会のスタンドにおられたかたです。女子学生の一人として当時の状況を知っておられるのです。そういう方が「こういう話は心の奥にしまつて、今までのことないけどね」と言われましたが、戦争体験、戦争でいのちが不合理に奪われることについて、当時の思いを語ってくださいるようになりました。

学徒出陣でパイロットになられ、ゼロ戦で特攻出撃されたものの会敵せず生還された方や、戦後BC級戦犯として死刑判決を受けながら、裁判闘争の結果、懲役二十年に減刑になられた方がお話しくださったことも、鮮明に記憶に残っております。

『中外日報』は、仏教系の新聞社ですから、座禅研修を学生が運営するということに視点を置かれて、記事を書いてくださっていました。朝課、提唱、作務、こういうこ

とをやる。「いのちを伝える」「いのちをみつめて」ということが主題だということを、はっきりと記事にしてくださいました。

当然、座禅をしている者は禅堂で座禅をしているわけですが、そのお世話も学生がやっています。食事の世話も、講師の送り迎えも、座禅会の運営をすべて学生がやっています。ただ、研修センターへ行って座禅をして、それでおしまいではありません。この五泊六日のために、学生たちは三カ月くらい前から準備に入ります。座禅会が失敗しないようにということ、ものすごい労力を使うのです。

話をして頂いた内容は冊子にして残します。冊子にするということは、録音を文章化して、それを見てもらって、割付をして印刷して製本しなければいけません。それには当然、前書きや後書きも付けなくてはいけない、表紙のデザインも考えるという作業を学生が全部やります。これも禅の活動とみてよいと思います。

それでも専門の勉強をするゼミより良いのかどうか、それはわかりませんが、ただ就職に関して言えば、専門の勉強をしなかったからといって、私のゼミの学生が就

職で困ったことはあまりありません。

座禅をしているということで、面白いやつだと採ってくださるような企業もあり、リーマンショックによる不況の時なども、そう悪い就職状況ではありませんでした。今まで、就職を希望する者で就職できなかったものは一人もいません。ただし、卒業式の後、三月の二十日から三十日の間に決まったという者はたくさんいました。ぎりぎりになると、結構拾う神が出てきてくださる。これもやはり、仏様のおかげかなと思うことがよくあります。

学生が聞いた講演を文章化して残し、纏めたものが一冊の本になって出版されています。『学生が聞いた禅 濱田徹道講話録』です。学生の活動が出版にまで届くのです。内容は出版社が絡むわけですから当然精査しております。出版社としてもいい加減なものを出せませんので、内容を見て、これならいいでしょうということで出してくれるわけです。

座禅会で話をしてくださったことを、何年も蓄積してまとめて出したのです。これにはプロの手は入っていません。学生がその気になって、面白いなと思ってやったこと

が、こういうことにまでなるのです。私もここまで来るとは思っておりませんでしたので、感激いたしました。

他にも、お話をしていたいただいた内容を、編集して出しているのが、『学徒出陣そして特攻』です。ご自分も特攻隊の編成におられながら、出撃できず戦友を見送って、生き残った方がお話をしてくださった内容を一冊にまとめています。

もう一冊は、『カウラ捕虜収容所 日本兵脱走事件』です。たぶん日本全国でカウラ捕虜収容所を知っておられる方は、もうほとんどおられないと思いますが、太平洋戦争のときに、オーストラリア軍の捕虜になって、カウラという田舎町に集められた方が、暴動事件を起こして、一晩で二百三十人亡くなったという事件がありました。その生き残りの人たちのお話を聞いてまとめたものです。

こういうものを学生が出してしまふ。そういうものなのです。その源流というか、座禅会に参加する学生たちが読むための、手引きのしおりの編集も全部学生がやります。こうやって毎年しおりを出すことが入門のようなもので、講演内容を文字化することで、力がついていきます。

上級生が食事の世話をするためのレシビも作られています。

す。こんなものまで作るのです。当然作れという指示は出しておりません。けれども学生が、世話をするにはこういうふうにやったらいいというのを、代々先輩から聞いて蓄積しているのです。

この座禅会二十四回の中で、これだけは自信を持ってお伝えできる、是非お聞きいただきたいことがあります。それは何かと言いますと、座禅会の一晩目は痛い、つらい、こんなところへ連れられてきて、ひどい目に遭わされていると思うそうです。これは虐待ではないかというような思いを学生は持ちます。ところが、二晩目から三晩目ぐらいになると、そういう反発の思いが消えます。どうなるかと言いますと、先輩たちが朝起こしてくれて、食事の世話も全部してくれて、その中でわれわれは、座らせてもらっているのだなということに気がつく。痛い、つらいというのは当然あるのですけれども、どうもそういう環境を先輩たちから与えてもらっている。自分に対して、そういうことをしてくださる人がいるのだということに気がつく、自分だけではない、多くの人に支えられている世界というのが、そこに見えてきます。それは代々、先輩から受け継

がれているのだと気づくのです。そうすると、来年は僕たちが後輩のためにやってやるのだという気になって、座禅会が終わります。終わった時点で、来年はどういうふうにするか、という話を学生はしています。

理屈で言えば、何とでも言えるのですが、これが座禅のありがたさ、座禅のすこみではないかなと思います。そういう「いのち」というか、「ちから」を座禅は持っているのです。

### 新しい活動を求めて

実は、広島経済大学では七年前から、座禅を授業科目にしております。履修して十五回座禅をすると二単位になります。経済大学でなぜ座禅が単位にできるのか、日本の伝統的精神性を学ぶとか、理由はいろいろ考えられますが、二十何年か座禅会をやってきて、学生にとって間違いなく良い効果があると思います。何か知らないけれども、学生にとって良い効果があるということで、教務担当者も反対されなかったのだらうと思います。

実施に当たって、いろいろ障害はありましたが、いまは

禅と学生（岡本）

アクティブ・ラーニングというのも方向性としてありますので、「まあよかろう」ということで、前期・後期共に開講しています。取れる単位は、前期か後期で二単位ですけれども、中には単位取得後もずっと座りに来ている学生もおります。

一緒に座っていると、何か気になることや、いろいろな思いを学生は話してくれます。私は、学生相談室の担当でもあり、学生と話をするのが仕事の一つなのですが、中には、「悟りとは何だ」というようなことを言ってくる学生もおります。あからさまに「悟りとは何だ」と言われると、ちょっと困ってしまうのですけれども、道場ではありませんし、禅問答の知識もありませんから、「昔、仙厓さんという和尚が博多におられて、カエルの絵を描いて、その上に、座禅して、人が仏になるならば、と書いておられたよ」というような話をしたりするのですが、そうすると本人も、何か分かったような、分からんような、おれはカエルと一緒にいたい、思うかどうか知りませんけれども、要するに、いまここで力いっぱい生きていくこと、それが自分なのだ。それがいのちの燃焼なのだ、ということに

気づいてくれる学生もおります。そういう学生がいると、本当にうれしいです。

ただ、座禅研修会で食事の世話をしてくれている人たちなどには、道元禅師の『典座教訓』の中にある、「他はこれ吾にあらず」というような話をすることがあります。自分自身がやっている、そのことを外して、ああだこうだという暇はないよという話は、案外素直に受けてくれます。

その一所懸命さというか、一つのことを打ち込んでやっていくという片鱗、たった五泊六日の座禅会で、がらっと人間が変わるとは、期待はしていませんけれども、しかしその中で、やはり何か変わっていつてくれるものがあるよという感じがしています。

近頃は、誰かの本にありましたけれども、スマホが宗教なのですね。スマホが宗教に変わって、いろいろな回答を出してくれるというような時代になってきました。癌の診断など、東京大学の先生よりも、「ワトソン」という大きなコンピュータのほうが、正確な判断をするということもニュースに出ていましたが、人間業ではとても行けないところまで来ているのかもしれない。けれども、ただ、

こうして今日、皆さんとお会いできている。お会いできてお話をさせていただいているということは、電波を通してと言いますか、スマホのように、機械を通してではない伝わり方が、絶対にあると思います。禅はやはり冷暖自知、体験してみることによってしか感じられないものだと思います。そういう意味で、座禅というものが、二千五百年間命脈を保ち続けられているのは、その現れというふうに、私は考えております。

広島地方紙『中国新聞』のコラム欄に、「座禅がいまブーム」ということで「授業に取り入れた広島市内の大学がある。悩みが薄れると学生に評判で、受講するのも抽選らしい」というふうに、書き込んでくださっていました。

これは私の本意ではないのですけれども、マスコミの人が出してくださるということは、禅とのご縁ができるという可能性があるとということなのです。僕も私も座禅をしてみようかと思われ、ご縁を結んでいただくには、このマスキミの力というものは非常に大きいと私は思っています。

ここ十年間「オキナワを歩く」と題し、三日間、食事はポカリスエットとカロリーメイトだけで沖繩を歩いていま



す。約五十、六十キロになるのですけれども、全行程徒歩で移動します。戦跡を歩き、多くの方が亡くなった現地です。それを目撃された方に話を聞かせていただくと、この活動です。「足実地を踏んで一を以って之を貫く」という言葉があります。やはり自分の足で歩いて、そこで自分の目で見、肌で感じ取る。そういうものを、われわれは大切にしていけたらと思います。今年六十五歳になり、体力的にはきついのですが、学生たちと歩いてきました。

広島でも、「広島を学ぶ」というタイトルで、被爆地を歩いて現地で話を聞いています。「広島を学ぶ」は、二単位の授業になっており、三日間の合宿で行う集中講義で、その内の一日は、ともかく広島を歩かせて考えさせます。八月の暑いときですけれども歩かせます。何を考えると具体的に言いません。ただ真面目に自分で考えてください。そこで、一瞬にして何万もの方がなくなったという事実があったということ、その事実をどのように自分とはらえるのか、どういう思いをするのかということを通じて出してください。それがいずれ、ひよつとしたら将来、あなた方のためになりますよと伝えます。

禅と学生（岡本）

この授業はいま広域型単位互換授業として、大阪府立大学や近畿大学、桃山学院など南大阪のコンソーシアムの学生も聞きに来てくれます。それ以外にも、沖縄や東京の大学の学生が参加してくれています。

実はこれも私に言わせれば禅の一貫なのです。歩いていける間に、精神的に集中していったら、心が沈静化していったら、その中でふつと気づくことがあるだろう。それが出てくればそれでよしということですよ。

「オキナワを歩く」で聞いた話も、学生が全部テープ起こしをして、自分たちの感想を付けて出版しております。自分た



広島を学ぶ

## 禪と学生（岡本）

ちが撮影したDVDまで付いております。現在六冊出してあります。各冊、沖繩戦で活動された女子学徒隊の方がお話をされたものを紹介していますので、沖繩の方に非常に喜んでいただいておりますけれども、実はこれが座禪の成果であるということには、だれも気づいてくださっていないというのが現状です。

### 終わりに

学生と付き合ってきて教えられたことは、その時その時に全力を尽くすことしか、我々にできることはないが、結果はすぐには出てこないということです。二十年後かもしれない。成果は一人一人の内にあり、個々の環境を大切にすればいい。成果は一人一人の内にあり、個々の環境を大切にすればいい。本人の思いどおりにもなりません。当然私の思いどおりには絶対になりません。学生に期待したらまず裏切られます。そのままを見るしかないのです。あとはこちらに思いがあるとするれば、待つことに徹するしかない。そこでできることは、それぞれの学生の幸多き人生を祈ることしかありません。

水のそばまで連れて行っても、意思がなければ水は飲め

ません。けれども水を飲まないと、われわれは生きていけない。いのちというものに気づかなければ、自分の人生は全うできないのです。それはあくまでも個人の作業によります。

そうすると、われわれにできることは、飲ませることではなく、飲む意思を気長に育てることしかないということになると思います。それは、その学生その学生を大切に受容して、その学生の気持ちを高めていくことであろう思います。時には誤解され恨みを買うようなこともあります。騙されることはしょっちゅうです。それでも学生の将来を思い、寄り添っていくことに「いのちを見つめる」ことの答えがあるように思えます。

ちよつと長くなりましたけれども、一応、これで私の話は終えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

※本講演録で紹介された活動の詳細は、

広島経済大学岡本ゼミナールのホームページをご覧ください。

[http://www.hue.ac.jp/Seminar/sd\\_oka/](http://www.hue.ac.jp/Seminar/sd_oka/)